

日常の仏教語

いちだいじ 「一大事」

携帯がない！電車が止まった！私たちは日常の中で、想定外のことが起きると、つい「これは一大事だ」と慌ててしまいます。この「一大事」、もともとは仏教語とされています。あるお経には「仏さまが世に現れたのは一大事の因縁のためである」と説かれ、仏さまが人間の苦しみの根源を滅し、さとりを開かせることを目的に現れたことを指しています。本来は「さとり」という究極の目標そのものを指す言葉でしたが、時代とともにこれを見逃したら後がない」という切迫感が強調され、「大変な事柄」を意味するようになったとされています。

浄土宗新聞 6月号より抜粋



お経の勉強シリーズ 「日常勤行編」

原文

弥陀本誓願 極楽之要門
定散等回向 速証無生身

書き下し

弥陀の本誓願は

極楽の要門なり

定散等しく回向して

速やかに無生身を証せん

現代語訳

阿弥陀仏の本願は極楽（往生）のための大切な教えです。定善・散善など（の諸々の修行によって得た功德）を（極楽往生のために）回し向けて、速やかに無生の身（＝もはや迷いの世に生まれかわることのない身）を得ましょう。

この「お経」は「本誓偈」と呼ばれるものです。阿弥陀仏の誓願に基づき、これまでに積んできた功德をすべて回向して（＝回し向けて）往生・成仏を目指しましょうという趣旨のお経です。まさに自身の往生を願った文と言えます。念仏や読経は本来、自身の往生のために称えるものですし、当然、日常勤行の目的も第一義にははそこにあります。ですから、日常勤行の際も、まずはこの回向文を唱えるべきということになります。

出典元 安達俊英著「日常勤行式の解説」



「三百年の祈り」が、現代の孤独を包み込む。未曾有の国難を乗り越え、命の有り難みに立ち返る場所

享保十七年（一七三二年）、日本全土を襲った大飢饉。この鹿島でも、多くの尊い命が失われました。その悲しみの底で、亡くなったすべての人々を敵味方なく救い、供養するために建てられたのが当山の供養塔です。飽食の時代と言われる現代。しかし私たちは、目に見えない不安や孤独という「心の飢え」に直面しています。苔むした供養塔の前に立つと、当時の人々が危機の中で互いを思いやり、祈りを捧げた温かい記憶が伝わってきます。

この供養塔は第十二世誠譽上人によって建立されました。爾来、源昌寺の境内にてその長い歴史の時間をずっと見守り頂いているのです。



享保の大飢饉 供養塔

初念仏講&バンド演奏

令和8年1月12日（祝）10時より初念仏講を執り行いました。

大雪の予報があり、心配していましたが天気に恵まれ無事に開催することが出来ました。寒い中にたくさんのご参詣をいただき有難うございました。令和8年になって初めての法要で、新年を迎えて新たな気持ちでお念仏を皆様と共に唱えし、新しい年がよい年でありますようにと祈念いたしました。



音楽には「心」を清らかにする効果があるそうです。音楽セブピー効果といい、心地よい音楽に触れることは心と体をリフレッシュするのだと言われております。法要の後は、「THE TAXMAN」による演奏をして頂きました。

ビートルズのコピーバンドでもあるメンバーで、「え！お寺で！」という驚きもありましたが、心地よい音色とテンポある曲目に心躍る思いがしました。新たな年が心躍るいい一年でありますように、そうみんなが願った瞬間でありました。

